

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11510

研究課題名（和文）スポーツにおけるLGBT“主流化”の傾向とその問題点に関する研究

研究課題名（英文）Study on the trend of LGBT "mainstreaming" in sport and its problems.

研究代表者

岡田 桂 (Okada, Kei)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：90386657

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、民主主義圏の国・地域で進展しつつある性的マイノリティの権利確立の潮流においてスポーツが果たす役割、およびその状況を調査・考察した。スポーツという文化領域は、身体そのものを用いて競い合うという条件から、原理的なジェンダー平等を達成することが困難であり、なおかつ歴史的経緯から男性性とその理想を体現するものとして利用されてきた。今回の研究では、LGBTQと概括される性的マイノリティのスポーツ参加においては、レズビアン/ゲイというシスジェンダーのマイノリティ受容が徐々に進む一方、トランスジェンダー（特に女性）などのジェンダーマイノリティが取り残されつつある現況までをあきらかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、スポーツという英米を中心に発達した文化が、セクシュアリティ上のマイノリティ（レズビアンやゲイ）の受容を進めながらも、その男性身体優位という原理的な制約によっていまだ男女というジェンダー上の格差（特に現在ではトランスジェンダーやDSD選手に対する差別的な取り扱い）を温存し、なおかつ人種を含めた地域的な格差をも解消し得ていないことをあきらかにした。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the role of sport and its status in the developing trend of establishing the rights of sexual minorities in countries and regions of the democratic world. The cultural domain of sport has been used as an embodiment of masculinity and its ideals due to its historical background, even though it is difficult to achieve gender equality in principle due to the conditions of competition with the body itself. The study revealed a situation where gender minorities or gender queer such as transgender people are being left behind, while cisgender minorities such as lesbians/gays are gradually gaining acceptance.

研究分野：社会学

キーワード：スポーツ ジェンダー セクシュアリティ lgbtq トランスジェンダー 人種

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、性的マイノリティ(以後LGBTと表記)の被る社会的差別や抑圧についての研究は相当蓄積されてきた。特に2000年代以降、英米を中心とした民主主義のリーダーを標榜する地域においては、最も保守的といわれてきた軍隊とスポーツの領域においてもLGBTの受容が進み始めている。(例:米軍における同性愛者排除規定の撤廃、プロスポーツ界におけるゲイ男性選手のカムアウトなど)スポーツは世界的に影響力の大きい文化であり、その中でLGBTの活躍が可視化されることは、偏見を払拭し、社会的平等を進める上で好ましい傾向といえる。しかし一方で、こうした傾向は主に以下の3点の問題を含んでいる。

- (1) スポーツの持つ良いイメージと人権保障としてのLGBTの組みあわせが政治的に利用され、英米を中心とした民主的な先進欧州諸国と、それに対立し性的多様性を認めない人権抑圧地域であるイスラム諸国、という単純化された図式が喧伝されてしまう。それは同時に、英米・欧州系の白人対中東系の人々という、人種的な対立と格差のイメージを助長してしまう。
- (2) 男性文化として発達してきたスポーツでは、男性による競技やパフォーマンスが中心化され、女性スポーツが瑣末化されてきた。これはLGBTのスポーツ参加が促進しても残される問題であり、男性ジェンダーであるゲイ男性(G)の優位、女性ジェンダーであるレズビアン女性(L)の劣位というジェンダー格差が固定されてしまう懸念がある。
- (3) そもそもジェンダー化されたスポーツという領域で、その区分(男女というジェンダー)をゆるがすトランスジェンダー(T)は、典型的な排除を被ってきた。またトランスジェンダーだという自認がなくても、生まれつき男性ホルモン値が高い女性選手は、一種の身体特質的なトランスジェンダーとして競技から排除されてしまっている。その成り立ちから原理的にジェンダー格差を含むスポーツにおいて、トランスジェンダー的な存在をいかに包摂できるかは、LGBTにおける「LGB>T」という内部格差を含めて大きな課題となる。

男性優位というかたちでジェンダー化され、そしておそらくは人種化(白人中心/それが反転した黒人身体能力神話)されたスポーツの領域においてLGBTの権利確保を行うためには、セクシュアリティ・ジェンダー・人種にまたがる、そのマイノリティ内部の多様性を維持しながら、いかに格差を解消してゆくことができるかという、スポーツ研究、ジェンダー/セクシュアリティ研究に共通する課題に取り組む必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、LGBT包摂の先進地域とみなされている英米での事例を整理し、その良い点(応用可能な点)と問題点を把握すること、及び、その考察を通じて、LGBT内部の多様性を犠牲にしないより広い意味でのスポーツ参加と平等を実現する可能性を提示することにある。これはまた、まだ端緒にすぎたばかりの日本におけるスポーツとLGBT参加の環境にとって、今後の方策を探る上での指針を提供することにもつながる。

3. 研究の方法

本研究は、以下の4点に分けて実施する。

- (1) ここ数年の、特にプロレベルの英米スポーツ界におけるLGBT選手のカムアウト事例、およびオリンピックなどのメガスポーツ・イベントへの参加事例を、新聞や雑誌、報道資料や自伝・書籍の言説から調査し、それを可能にした社会情勢の変化を考察する。この結果、これまでの予備的知見から、おそらくLGBT受容の上での「ジェンダー志向」(外見が男性的・女性的な性的マイノリティが受け入れられやすい)があきらかになると予想される。
- (2) LGBTと括られる性的マイノリティの中でも、トランスジェンダー(T)選手の数が圧倒的に少なく、スポーツ参加への障壁が高いことを実際のデータを用いて示し、ジェンダー化されたスポーツ領域の原理的な限界をふまえて考察する。
- (3) 2000年代以降、“女性的”競技と見なされてきた男子フィギュアスケートにおいて日本人や中国人、あるいは中国系アメリカ人/カナダ人など東アジア系選手の活躍が顕著になっていることを、人種とジェンダーの関係性(英米社会で「男性的でない」とみなされがちな東アジア人男性が、「男性的でない」とみなされる競技で活躍する構図)から考察し、日/英米の新聞や報道資料、スポーツ専門誌の言説、先行研究の分析を用いて、スポーツにおける人種とジェンダー・イメージ(偏見)をあきらかにする。

- (4) 性的マイノリティの世界的スポーツ大会である「ゲイ・ゲームス 2022 年香港大会」を参与観察し、上記(3)で提示した競技によるジェンダー観の相違とセクシュアリティの関係、そこに投影される人種観について調査し、文献・資料研究から導き出された理論の検証を行う。この際、可能な限り参加選手・組織委員にインタビュー調査を行う。

上記の項目中、(1)(2)(3)に関しては先行研究の検討・資料収集及び分析が中心となり、実施の年度を問わないため、2019～2021年の3年間を用いて研究分担者とともに逐次実施する。(4)は開催年度が2022年に決まっているため、この参与観察をそれまでの3年間の資料研究における成果の検証機会と位置づけ、最終年度の実施とする。

4. 研究成果

本研究では、「男らしさ」の理想にとって同性愛がタブーでなくなりつつある英米を中心とした社会の潮流（いわゆる LGBT の主流化）の現状と経緯を調査し、同時に性的マイノリティとスポーツ参加をめぐる問題がシスジェンダー中心志向であることをあきらかにした。LGBT 主流化といわれる傾向がスポーツ界にも浸透していく中で、結果的に古くからの男女格差というジェンダー序列が固定され、スポーツが成立した近代という時代には想定されていなかった「ジェンダーの境界をわたる／二元性を越える」存在であるトランスジェンダーや DSD、ノンバイナリーなどの選手はさらに排除されていくという状況を考察し、なおかつこうした傾向が必ずしも普遍的なものではなく、英米を中心とした地域（英語圏の発想）で顕著であるという点も指摘した。

また、こうした LGBT 主流化を取り巻くホモノーマティブな状況は必ずしも現代的なものではなく、1950 年代以前にも見られた傾向ともいえ、これはジェンダーの理想とセクシュアリティの結びつきが固定的ではなく、時代や社会状況、文化によって変化し、多様でありうることの一端を示している。

一方で、研究方法(4)で予定していた参与観察は、ここ数年の香港をめぐる政治的状況の変化およびコロナ禍によってゲイ・ゲームス香港大会が一旦延期され、また再度の延期と他地域での共同開催という実質的な中止によって実施することができなかった。これに伴い、研究計画の一部であるスポーツとジェンダー・セクシュアリティ・人種に関する調査は今後の課題として残されることとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岡田 桂	4. 巻 72巻8号
2. 論文標題 トランスジェンダー・アスリートとスポーツの臨界：身体の多様性と公平性のどこに境界線を引くか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 522 - 527
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岡田 桂	4. 巻 7
2. 論文標題 “不完全に” クィア：性的少数者をめぐるアイデンティティ/文化の政治と LGBTの「生産性」言説がもたらしたもの	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報カルチュラル・スタディーズ	6. 最初と最後の頁 7~26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32237/arcs.7.0_7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡田 桂	4. 巻 27 (2)
2. 論文標題 スポーツにおけるマスキュリティのグローバルな再配置：フィギュアスケート・人種・セクシュアリティのジェンダー表象	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 スポーツ社会学研究	6. 最初と最後の頁 29 - 48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岡田 桂	4. 巻 70(1)
2. 論文標題 “男らしさ”とスポーツの相関：ゆらぐ男性性/ジェンダー/セクシュアリティと身体の文化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 53 - 58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岡田桂
2. 発表標題 トランスジェンダーアスリートとスポーツにおける性別二元制
3. 学会等名 成城大学グローバル研究センター主催シンポジウム『ポストヒューマニティ時代の身体とジェンダー / セクシュアリティ』（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡田桂
2. 発表標題 「スポーツとトランスジェンダー」
3. 学会等名 立命館大学国際言語文化研究所ジェンダー研究会 連続企画「フェミニズム×トランスジェンダー」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡田桂
2. 発表標題 ジェンダーからセックスへ？：オリンピック憲章にみるスポーツのセックス（身体）化とLGBT内秩序
3. 学会等名 スポーツ社会学会第 30 回大会 研究委員会企画シンポジウム「性の多様性をめぐるスポーツと権力」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山口理恵子、稲葉佳奈子、岡田桂
2. 発表標題 スポーツとダイバーシティ：スポーツの包摂、承認、排除
3. 学会等名 スポーツとジェンダー学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 Kei Okada	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Ergon-Verlag	5. 総ページ数 250
3. 書名 "Tokyo 2020 Olympics and Sexual Politics. Changes in Sexual Minorities Policies and Homo-Nationalism in the Lead-Up to Tokyo 2020" in Challenging Olympic Narratives: Japan, the Olympic Games and Tokyo 2020/21	

1. 著者名 田島良輝、神野賢治 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 スポーツの「あたりまえ」を疑え！ : スポーツへの多面的アプローチ	

1. 著者名 岡田 桂、山口 理恵子、稲葉 佳奈子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 206
3. 書名 スポーツとLGBTQ+ : シスジェンダー男性優位文化の周縁	

1. 著者名 竹崎 一真、山本 敦久、杉山 文野、岡田 桂、渡部 麻衣子、標葉 靖子、隠岐 さや香、久保 友香、関根 麻里恵、田中 東子、重田 園江、山本 由美子、門林 岳史	4. 発行年 2022年
2. 出版社 堀之内出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 ポストヒューマン・スタディーズへの招待	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山口 理恵子 (Yamaguchi Riekkō) (30509120)	城西大学・経営学部・教授 (32403)	
研究分担者	稲葉 佳奈子 (Inaba Kanako) (70431666)	成蹊大学・文学部・准教授 (32629)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関